

令和8年（2016）年度 校内研究実施計画書

1 研究主題及び教科

研究主題	<u>自ら考え、学び続ける子の育成</u> ～ 一人ひとりが自分の考えをもち、伝え合い、学び合う授業を通して ～
教科・領域	国語・説明文

2 主題設定の理由

（１） 学校教育目標と児童の実態について

本校では、学校教育目標「自ら学び、ともに生きる社会をつくろうとするこどもの育成」のもと、「自分・友だち・学校・地域を大切に作る心を育む学校」「自ら学び、仲間とともに学習や生活を高め合う力を育む学校」「保護者・地域とともにこどもを育む学校」をめざす学校像とし、日々の教育活動を進めている。

三世代が同居する家庭の児童がいる一方、様々な事情で家庭的に寂しい思いをしながら生活している子、また外国にルーツをもつ子など、生活経験や生活背景の異なる多様な子どもたちがともに学習している。子どもたちは、素直で明るく、与えられた問題に対して真面目にコツコツと努力することができる。また、困っている子には手助けができ、周りのなかまに思いやりの気持ちをもって接することができる子も多い。

令和6年度からは、教科・領域を国語科・説明的な文章として、研究主題を「自ら考え、学び続ける子の育成～一人ひとりが自分の考えをもち、伝え合い、学び合う授業を通して～」とし、研究を進めた。副主題を「一人ひとりが自分の考えをもち、伝え合い、学び合う授業を通して」としたことで、こども同士が自分の考えを伝え合い、学び合える授業づくりをめざした。説明的な文章に分野を絞って研修を進めたことで、学年の縦のつながりがわかってきた。その気づきが、系統的な指導につながりつつある。また、板書や掲示物を工夫することで本文を読み取るための有効な手立てを行うことができた。自分の考えをもつ時間を十分に確保したり、ペア学習やグループ学習を取り入れたりしたことで、児童一人ひとりが自分の考えをもてるようになってきた。一方で、主題にもある「学び合い」に関してはまだ達成できていないと言えない。自分の考えを伝えられる児童は増えているものの、「反応しながら聞く」「自分の考えを比べながら聞く」「友だちの考えにつなげ自分の考えを伝える」といった部分に大きな課題が見られた。

上記のことを踏まえて、本年度も昨年度と同様に研究主題を「自ら考え、学

学び続ける子の育成～一人ひとりが自分の考えをもち、伝え合い、学び合う授業を通して～」として、国語科を中心に研修を進めていく。主題の「自ら考え、学び続ける子の育成」は、すぐにあきらめてしまい、粘り強く最後まで取り組むことができないという本校の児童の課題をもとに設定した。この力は非認知能力の一つでもある「やりぬく力」として、今後児童に育てていきたい能力としても注目されている。学校教育目標「自ら学び、ともに生きる社会をつくろうとするこどもの育成」のもと、主体的に学びに向かい、粘り強く最後まで続けられる児童の育成に取り組んでいく。また、「考えをもっている、筋道を立てて、自分の言葉でわかりやすく相手に伝えることができない、自分の考えを順序良く表現することができない、友だちの考えと自分の考えを比較しながら聞くことができない」といった児童の「話す・聞く力」の改善に取り組むため、副主題は昨年度と同様に「一人ひとりが自分の考えをもち、伝え合い、学び合う授業を通して」と設定する。

今年度も、国語科の中から「説明文」に分野を絞って研修を進める。国語科においても系統性をもった授業を進め、国語の授業スタイルを作っていきたい。そのため、説明文においての読み取りの型や、要旨や要点をまとめるための手立て、筆者の主張に対する自分の考えのもたせ方なども研究していきたい。その中で、ペア・グループ活動を取り入れ、伝え合い学び合う場を設けることで、協働的な学習を深めていきたい。全体交流でも児童の「わからない」を出発点にそれぞれの考えをつなげたり、自分の考えと相手の考えを比較したりする授業を展開することで児童の考えを深めることができるようにしたい。

（２） 学習指導要領との関わり

学習指導要領では、こどもたちに育みたい資質・能力が次のように示されている。「生きて働く知識・技能の習得」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力の育成」「学びを人生や社会にいかそうとする学びに向かう力、人間性等の涵養」の３点が挙げられている。また、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善をおこなうこととし、児童が各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方（以下「見方・考え方」という。）を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見出して解決策を考えたり、思いや考えをともに創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ること。（学習指導 要領 p22）

これらについて、本校が「考えることを楽しみ、学び続ける子の育成」という研究主題のもとで進めてきた、「主体的な学びにつながる授業の導入の工夫や学習課題の設定」、「さまざまな考えを出し合う中で学びを広げ・深める学習活動の迫及」などは、学習指導要領の示す事項と方向を同じにするものであると考える。そして、下記（３）において、これまでの研究をもとにして設定した研究主題においても同様であると考え。具体的な実践を通して、本校児童の実態をふまえたうえで、学習指導要領の具現化への方策を研究していきたい。

(3) 研究主題について

上記(1)(2)をふまえ、研究主題を「自ら考え、学び続ける子の育成～一人ひとりが自分の考えをもち、伝え合い、学び合う授業を通して～」とする。主題の「自ら考え、学び続ける子の育成」は児童の主体性や自ら学ぶ姿勢、そして学びを支えるなかまづくり、学習環境の整備と充実について追求することである。

副主題として掲げた、「一人ひとりが自分の考えをもち、伝え合い、学び合う授業を通して」は、指導者が授業と児童を、あるいは児童と児童をどうつなぐか、思考力・判断力・表現力をいかに育むかということなどを研究することである。そして、国語科の研究を通して培った「学びに向かう力」を、教科を超えて学習活動全体へと波及することを意識して研究を進めていきたい。



「学び合う」授業づくり

本校における、学び合いの姿を以下のように設定することとする。こどもたち一人ひとりが、相手の考えを受け入れたり、自分の考えを見直して考えを深めたり、新たな視点で考えて答えや解決への道筋を見出したりするなどの姿。

ペア・グループ活動は、どのような目的で、いつ、どれくらいの時間取り入れるのか、考える必要がある。適した場面で活用することで、有効な働きをすると考える。また、相手との関わりの中で、互いの考えを交流し、聴いて考えて伝え合うことで、考えをつくったり考えが広がったり深まったりして、自分や相手の進歩を実感できる授業と考える。

3 研究内容及び方法（具体的な手立てまで詳しく書いてください）

(1) 研究仮説について

仮説① 対話的な学びを行うための手立て

児童が学びを深めていくためには、自分の意見を話したり、友だちの話を聞いたりすることが有効である。自分の考えを話すことで思考を明確にしたり、自分と他者の考えの相違点・共通点を見出すことで自分の考えをより深めたりすることができる。意見を交流することの目的を明確に持たせ、ペアやグループ、全体での話し合いの場を授業の中に位置づけていきたい。

仮説② 主体的に取り組むための手立て

学び合う力をつけるためには、児童任せの授業や教え込む授業ではなく、児

童とともにつくる授業が有効である。単元のゴールを見通した単元計画を作成することで、学びが明確となり、児童が見通しを持って学習に取り組むことができる考える。また、学習形態を工夫したり、児童が自己決定できる場を設定したりすることで、児童の主体性を促したい。

仮説③ 授業の参観・交流・助言

授業改善を進めるためには、個々の取組意識を向上させる必要がある。また、チーム河曲として「いつでも」「何でも」相談しあえる学年部づくりを進め、教材研究や児童理解を多角的な視点で行い、授業を参観する回数を増やし、多くの指導方法にふれあい、自らの支援・指導に活かしていきたい。仲間や外部講師からの具体的な助言や指摘を受け止め、自らの指導癖や教師としての姿勢を常に問い直し、互いに高めあえる教師集団づくりを進めながら、児童の学びを確かなものにしていきたい。

(2) 研究主題に迫るための重点方策

1 聞く力の育成

昨年度の研修の反省から、全学年を通して聞く力に課題があることがわかった。そこで、「伝え合い、学び合う学習」の「聞く」という部分に重点を置いて研修を進める。特に、全学年で統一されている「相手のほうを見て・反応しながら」という部分は、全学年で達成できるように進めていきたい。

聞く力の目標

低学年	中学年	高学年
①相手のほうを見る。 ②反応する。		
③相手の考えに対して感想を伝える。	④質問しながら聞く。 ⑤相手の考えに対して自分の考えをもつ。	⑥要点を捉える。 ⑦比較しながら聞く。 ⑧考えをまとめる。

2 話し方名人・聞き方名人の活用

児童の課題である「筋道を立てて、自分の言葉でわかりやすく相手に伝えられない」、「自分の考えを順序良く表現することができない」、「友だちの考えと自分の考えを比較しながら聴くことができない」といった課題を改善するために、今年度も「話し方名人・聞き方名人」を活用して授業を進める。

聞き手を意識し、声の大きさや体の向きを変えて話すことは、低学年から意識づけさせたい。また、中学年以降は、理由からではなく結論から話すように指導をしていく。相手に伝わりやすい話し方の順序を意識させたい。

聞き方においては、必ず反応することを低学年から意識づけさせる。みんな

の意見が受け入れられる学級づくりを大切にしていきたい。中学年・高学年では、自分の意見と比べながら聞いたり、相手の意見の要点をおさえたりすることを指導していく。

	話し方名人	聞き方名人
低 学 年	1. 3のこえで 2. きくひとにからだをむけて 3. さいごまではっきりと	1. しずかに 2. はなすひとのかおをみて 3. はんのうして 4. さいごまで
中 学 年	1. 聞こえる声で 2. 聞く人に体を向けて 3. 結論を先に 4. 最後まではっきりと	1. よいしせいで 2. 話す人を見て 3. 反応して 4. 自分の考えとくらべて
高 学 年	1. 聞こえる声で はっきりと 2. 聞 く人に体を向けて 3. 結論を先に 4. 友だちの考えにつなげて	1. 話す人を見て 2. 反応して 3. 話す人の要点をとらえて 4. 自分の考えと比べて

3 めあてと振り返りの充実

児童が学習に見通しをもち、主体性を高めるためには、教師から与えられた目標ではなく、児童自らが「解決したい」と思える「めあて」の設定が不可欠である。教師が身につけさせたいねらいを、児童の感想や興味をもとに、こどもの立場の言葉で提示していく。さらに、単元の導入で「何を、何のために学ぶのか」という最終的な目標を成果物を提示することで共有する。毎時間のめあてがゴールに繋がっていることを実感させることで、最後まで粘り強く取り組めるようにしていく。また、毎時間の終わりに、自らの学びの変容を言語化する時間を確保し、自己評価を行うことが、学びを確かなものにしていくと考える。「めあて」に対して「何が分かったのか」「何ができるようになったのか」という、問いに正対した「まとめ」と「ふりかえり」を行い、振り返りを通して、自身の考えの更新（自己との対話）を実感し、次の学習への意欲や自信につなげていきたい。

4 学びを支える言葉の育成

河曲小学校の児童には語彙力の少なさに課題がある。そこで、国語の教科書の付録に掲載されている「言葉の宝箱」を印刷して児童に配付する。該当学年よりも下の学年の「言葉の宝箱」も確認することができるため、児童にとって

語彙の蓄積を実感することができると考える。意味調べをして言葉の使い方を調べたり、日記や作文で使ったりすることで、こどもたちの語彙を増やしていきたい。また、読書量を増やしたり、図書の貸し出し冊数を増やしたりする取組を行い、児童の言葉の力の育成につなげる。

5 単元計画の充実

単元を通じて児童に必要な資質・能力を身に付けさせるために、児童の実態に即した単元計画を設定することが重要であると考えた。単元計画は、学習指導要領に設定された目標や指導事項を踏まえた上で、国語科教科用図書(光村図書)の単元末に掲載されている「見通しをもとう」を活用することを手立てとする。単元の導入段階で具体的な言語活動を児童と共有することで、単に教科書を読み進めるのではなく、何に向かうためにどんなことが必要なのかと目的意識を持って取り組むことができると考える。さらに、単元計画の中に、児童自身が学習の進め方やペースを自己決定できる機会を位置付けることで、児童一人ひとりが自律的に学びを調整する力を身につけ、自らの興味・関心に基づいて主体的に考え、学び続ける姿勢を確かなものにできると考える。

4 年間研修計画

一 学 期	4月 3日 (金)	ミニ研修会①	学級開きについて
	4月 9日 (木)	ミニ研修会②	エビペンの仕方について
	4月10日 (金)	第1回校内研修会	校内研修で大切にしたいこと・研究主題の設定と研修の方向性について
	4月22日 (水)	第2回校内研修会	授業力の向上について・研究授業事後検討会について
	4月27日 (月)	第3回校内研修会	学調・みえスタの採点
	5月11日 (月)	ミニ研修会③	個別の指導計画について
	6月16日 (火)	第4回校内研修会	研究授業5年 国語
	7月23日 (木)	第5回校内研修会	学調・みえスタの分析の還流・教育研究集会に向けて
二 学 期	10月28日 (水)	第6回校内研修	研究授業4年 国語
	10月 (日は未定)	第7回校内研修	
	11月 5日 (火)	第8回校内研修	研究授業特別支援 研究授業人権
三 学 期	1月27日 (水)	第9回校内研修会	研究授業 国語
	2月 (日は未定)	第10回校内研修会	各学年の成果と課題 本校子どもの強み・弱みの交流
	2月24日 (水)	第11回校内研修会	研修のまとめ 来年度へ向けて